

マイナスからプラスへ：政治・政治家イメージの変容

－ さいたま市高校生政治意識調査(2016・17・19・21・22)から －

From Negative to Positive: Transformation of Political Consciousness – Political consciousness survey of high school students in Saitama City (2016, 2017, 2018, 2019, 2021, 2022) –

松本 正生

Masao Matsumoto

はじめに

1. 投票態度：2022 参院選

- 1-1. 高校生有権者の投票行動
- 1-2. 「投票した・しなかった」を弁別するもの
- 1-3. 高校生非有権者の投票志向
- 1-4. 高校生と選挙過程

2. 政治意識・政治イメージ

- 2-1. 政治を動かしているもの
- 2-2. 政治満足度
- 2-3. 政治家信頼度
- 2-4. マイナスからプラスへ：イメージ変容か

3. 情報行動

- 3-1. ニュース視聴度
- 3-2. 情報源

まとめにかえて

〈要旨〉

埼玉大学社会調査研究センターでは、2022年7月の参院選の直後に、さいたま市の市立高等学校3校の全校生徒を対象に政治意識調査を実施した。市立高校生を対象とする調査は、過去4回、16年7月(参院選直後)、17年10月(衆院選直後)、19年9月(参院選後)、21年11月(衆院選直後)にも実施してきた。

16年から22年まで、5回の調査結果を概観すると、「政治満足度」と「政治家信頼度」にかんして、これまでみられた政治不満や政治家不信が解消されつつあることが明らかになった。マイナスからプラスへ、高校生の政治意識や政治イメージには、明確な変容が確認された。同時にそれは、2021年4月入学の1年次生からの、新たな世代の登場を示唆している。

また、政治満足度、政治家信頼度などの政治意識と、投票への志向性との間には、情報源(ないしニュース・ソース)を媒介とした相関関係の存在も類推された。

Saitama University Social Survey Research Center conducted a political consciousness survey of all students at three municipal high schools in Saitama City immediately after the House of Councillors elections in July 2022. The surveys that targeted municipal high school students have been conducted four times in the past, in July 2016, October 2017, and November 2021.

When looking at the results of five surveys from 2016 to 2022, specifically the items of “political satisfaction” and “trust in politicians”, it became clear that the political dissatisfaction and distrust in politicians that had been observed until now are being resolved. There are signs of transformation from a negative to positive one in the consciousness and impressions of politics among high school students.

Additionally, a correlation between political consciousness, such as political satisfaction and trust in politicians, and voting orientation was inferred, which was mediated by information sources (or news sources).

はじめに

埼玉大学社会調査研究センターでは、さいたま市教育委員会の協力により、2022年7月10日に投票が行われた参議院議員通常選挙の直後に、さいたま市の市立高等学校3校(浦和高等学校、浦和南高等学校、大宮北高等学校)の全校生徒(1~3年生)を対象に政治意識調査を実施した(回答者総数は2,580人)。市立高校生を対象とする調査は、過去4回、16年7月(参院選直後)、17年10月(衆院選直後)、19年9月(参院選後)、21年11月(衆院選直後)にも実施している(注1)。

本小論では、① 22年の参院選に高校生たちはどのように対応したのか、② 16年から22年まで、5回の調査結果にみられる政治意識・政治イメージや情報行動の推移、さらに、③ 同一集団(コホート)に関する経年結果に基づく、高校生の政治的社会化の位相などを、それぞれ確認していきたい。

「さいたま市高校生政治意識調査 2022」の調査票、および、単純集計結果については、後掲の資料を参照されたい。

1. 投票態度：2022参院選

1-1. 高校生有権者の投票行動

まずは、高校生有権者が22年参院選にどう対応したのかを確認してみよう。参院選時における高校生有権者(2022.7.11時点での満18歳以上)は264名で、3年生全体の32%に相当した。[表1]は、「投票したか、しなかったか」に対する回答結果をまとめたものである。今回の参院選での高校生の投票率(「投票した」回答の比率、以下「投票率」)は71%であった。

表1. 投票したか・しなかったか(3年生有権者)

	投票した					投票しなかった				
	16(参)	17(衆)	19(参)	21(衆)	22(参)	16(参)	17(衆)	19(参)	21(衆)	22(参)
全体	74	64	53	73	71	25	36	46	26	29

(%)

過去の国政選挙における高校生有権者の「投票率」は、74%(16年参院選)→64%(17年衆院選)→53%(19年参院選)73%(21年衆院選)と推移してきた。衆院選と参院選とでは実施時期が異なり、高校3年生中の有権者のシェアも、21年衆院選時は61%、22年参院選時は32%と大きな差が存在するため、単純な比較には留意が必要である。しかしながら、今回は、19年参院選に比べて18ポイント上昇し、

昨(21)年の衆院選や18歳選挙権導入時の16年参院選とほぼ同様の値を示している。

試みに、高校生有権者の「投票率」を、さいたま市の18歳全体と比べると、21ポイントも上回っている。同じ18歳を、市立高校生有権者-さいたま市民有権者間で比較すると、16年(高校生有権者=74%-市民有権者=60%、以下同様)、17年(64%-50%)、19年(53%-41%)、21年(73%-53%)、22年(71%-50%)と推移しており、当初は12~14ポイントであった差が、ここ2回(21、22年)は20ポイント以上に拡大している。高校生有権者のパフォーマンスを評価しておきたい。

「投票した」と回答した人に「投票日当日に投票したか、期日前投票をしたか」を聞いた結果が[表2]である。投票日当日が占める割合は、昨21年の衆院選で、17年(衆)や19年(参)から10ポイント以上増加し88%となったが、22年参院選も8割を上回る高い値となっている。

表2. 当日投票か・期日前投票か

	当日投票をした					期日前投票をした				
	16(参)	17(衆)	19(参)	21(衆)	22(参)	16(参)	17(衆)	19(参)	21(衆)	22(参)
全体	93	76	74	88	82	7	24	26	12	17

(%)

他方、期日前投票は、17年(衆)や19年(参)には2割を上回ったものの、21年(衆)、22年(参)と1割台に低下している。因みに、22年参院選での、さいたま市全体における投票中の期日前投票割合は33%と過去最高に達した。経年の推移に関しても、17年(衆)=23%、19年(参)=31%、21年(衆)=26%、22年(参)=33%と上昇傾向にあり、高校生とは逆の傾向を示している。

次に、「誰と投票に行ったか」の結果をまとめた[表3]を参照されたい。「自分1人か・家族といっしょか」にかんしては、19年の参院選以降のここ3回、「家族と」が80%と圧倒的なシェアを占めている。「家族連れ投票」は、高校生の投票行動としてすっかり定番となったと言えるだろう。

ただ、「家族といっしょに」が大多数を占めると

表3. 誰と投票に行ったか

	1人で				家族と			
	17(衆)	19(参)	21(衆)	22(参)	17(衆)	19(参)	21(衆)	22(参)
男性	38	28	23	28	60	70	76	70
女性	12	12	13	13	87	88	85	88
全体	25	19	18	20	74	80	80	80

(%)

はいえ、「一人で(投票した)」とする高校生も2割程度存在している。家族投票派と一人投票派との間には、選挙や政治にかんする意識において、何らかの相違が存在するのだろうか。ここでは、被選挙権年齢についてどうするべきかとのクロス集計結果を取り上げたい。22年調査で、「選挙に立候補できる被選挙権年齢は、都道府県知事と参議院議員では30歳以上、それ以外では25歳以上となっています。あなたは、被選挙権についてどうするべきだと思いますか」と問うた結果は、「選挙権と同じ18以上にすべきだ」が8%、「引き下げるべきだが、選挙権と同じ年齢まで引き下げる必要はない」が32%、「今のままでよい」が47%であった。

〔表4〕は、これらの回答うち「選挙権と同じ18以上にすべきだ」と「引き下げるべきだが、選挙権と同じ年齢まで引き下げる必要はない」を便宜的に「引き下げるべき」として合計し、家族投票派と一人投票派の回答結果を比較したものである。被選挙権年齢を「引き下げるべき」か「今のままでよい」かについて、両派の比率に相違は存在しないことが確認できよう。

今度は、高校生有権者のうち、「投票しなかった」人たち(22年は29%)に焦点を当てたい。「投票しなかった理由」を2つまで選んでもらった結果が〔表5〕である。「他の用事(勉強や部活など)があったから」の割合が63%と最も高い。経年の推移にかんしても、「他の用事があったから」が一貫して多数を

表4. 「誰と投票に行ったか」×「被選挙権についてどうするべきか」

	引き下げるべき	今のままでよい	わからない
一人で	41	41	19
家族と	40	41	19

(%)

表5. 投票しなかった理由(2つまで)

	17(衆)	19(参)	21(衆)	22(参)
他の用事(勉強や部活など)があったから	67	56	67	63
病気や体調不良	8	2	7	4
面倒だったから	12	19	11	13
選挙に関心がなかったから	9	16	7	11
誰(どの政党)を選んでいいのかわからなかったから	32	40	20	30

(%)

占める傾向に変化はみられない。これ以外の理由では、「誰(どの政党)を選んでいいのかわからなかったから」が30%で次いでいる。ただ、「誰を選んでいいのかわからなかったから」については、19年(参)=40%、21年(衆)=20%、22年(参)=30%という推移からも示唆されるように、衆院選と参院選との間で、条件がやや異なるように思われる。

1-2. 「投票した・しなかった」を弁別するもの

ここからは、高校生有権者にかんして、「投票した」・「しなかった」を弁別する要素は何かを確認してみよう。

過去の調査結果から得られた知見として、投票の動機づけと相関の高い要素が、親および家族の役割にほかならない。まず、「子どものころ、親といっしょに投票所に行ったことがあるか」との関係を取り上げてみよう。高校生全体における親との投票所体験の有・無の比率は、16年=47%(ある)−44%(ない):以下同じ、17年=50%−38%、19年=51%−38%、21年=49%−39%、22年=54%−37%と、大きな変化はみられない。

〔表6〕は、「投票した・しなかった」と「親との投票所体験の有・無」とのクロス集計結果を、まとめたものである。親との投票所体験の有無について、「投票した」−「投票しなかった」間には、「投票した」人たちは「ある」が多数を占め、「投票しなかった」人たちは「ない」が多数を占めるとい、大小関係の逆転が存在している。

経年の推移に注目すると、「投票した」人たちにおいて、親との投票所体験が「ある」比率は上昇傾向にあり、22年参院選結果では62%に達している。他方、「投票しなかった」人たちの「ある」比率は、19年(参)=39%、21年(衆)=35%、22年(参)=34%と下降気味である。幼少期の投票所体験、言い換えれば、親の参加態度の影響力が示唆されよう。

今度は、家族と政治の話をする頻度を取り上げたい。高校生全体での割合は、16年=45%(「よくある」+「ときどきある」)−49%(「あまりない」+

表6. 「投票したか」×「親との投票所体験」

	ある			ない		
	19(参)	21(衆)	22(参)	19(参)	21(衆)	22(参)
投票した	51	53	62	38	35	31
投票しなかった	39	35	34	52	48	51

(%)

表7. 「投票したか」×「家族と政治の話をするか」

	よくある					ときどきある					あまりない					ほとんどない				
	16(参)	17(衆)	19(参)	21(衆)	22(参)	16(参)	17(衆)	19(参)	21(衆)	22(参)	16(参)	17(衆)	19(参)	21(衆)	22(参)	16(参)	17(衆)	19(参)	21(衆)	22(参)
投票した	11	13	12	16	15	42	52	39	49	42	17	27	29	22	29	21	9	20	12	13
投票しなかった	8	3	2	10	13	33	41	33	29	26	21	27	30	35	33	33	29	35	25	26

(%)

表8. 「投票したか」×「友人と政治の話をするか」

	よくある					ときどきある					あまりない					ほとんどない				
	16(参)	17(衆)	19(参)	21(衆)	22(参)	16(参)	17(衆)	19(参)	21(衆)	22(参)	16(参)	17(衆)	19(参)	21(衆)	22(参)	16(参)	17(衆)	19(参)	21(衆)	22(参)
投票した	—	4	2	6	4	17	29	18	24	23	32	28	33	36	36	44	39	47	33	37
投票しなかった	—	1	3	6	9	17	22	12	14	24	33	30	24	37	29	46	47	61	43	36

(%)

「ほとんどない」、以下同じ)、17年＝51%－48%、19年＝44%－56%、21年＝58%－41%、22年＝58%－42%と推移しており、21年(衆)、22年(参)のここ2回は、「ある」派が多数を占めるようになってきた。

〔表7〕は、「投票した・しなかった」と家族と政治の話をする頻度とのクロス結果を示している。親との投票所体験と同様の傾向が存在する。「よくある」+「ときどきある」を「ある」、「あまりない」+「ほとんどない」を「ない」として経年の大小関係を集計し直すと、「投票した」人たちにおいては、16年＝53%(ある)－38%(ない)：以下同じ、17年＝65%－36%、19年＝51%－49%、21年＝65%－34%、22年＝57%－42%、「投票しなかった」人たちでは、16年＝41%－54%、17年＝44%－56%、19年＝35%－65%、21年＝39%－60%、22年＝39%－59%となっている。一貫して「投票した」では「(家族と政治の話をする)」傾向が高く、「投票しなかった」は逆に「しない」傾向が高いというラベリングが可能となる。投票行動にかんしては、家庭環境の比重の大きいことが確認できよう。

家族に次いで、「友人との政治の話」と「投票した・しなかった」との関係性をみてみよう。家族とは異なり、友人と政治の話をする度合いはもともと低く、16年＝17%(「よくある」+「ときどきある」)－77%(「あまりない」+「ほとんどない」、以下同じ)、17年＝19%－80%、19年＝16%－84%、21年＝27%－71%、22年＝25%－75%と推移している。21年(衆)、22年(参)と「ある」の比率が上昇したものの、「ない」の割合が圧倒的多数を占め続けている。

〔表8〕を参照されたい。「あまり」と「ほとんど」を合計した「しない」の比率は、16年は「投票した」人たちが76%・「しなかった」人たちが

79%(以下同じ)、17年が67%・77%、19年が80%・85%、21年が69%・80%、22年が73%・65%で、各年の値に若干の相違が存在するとはいえ、友人との政治の話の有・無は「投票する・しない」の弁別要素には成り得ない。

「投票した」か「しなかった」かの弁別要素については、さらに、政治満足度と政治家信頼度とを取り上げたい。22年参院選調査で、「あなたは、現在の政治に対してどの程度満足していますか」と聞いた結果は、「大いに満足している」が4%、「だいたい満足している」が44%、「やや不満足である」が28%、「大いに不満足である」が6%であった。

〔表9〕は、このうち「大いに満足している」+「だいたい満足している」＝「満足(満足派)」、「やや不満足である」+「大いに不満足である」＝「不満(不満派)」として、「投票した・しなかった」とのクロス集計の結果をまとめている。参院選の「投票率」は、満足派に比べて不満派の方がやや高めであることが確認できる。

表9. 「政治に対してどの程度満足しているか」×「参議院議員選挙で投票したか」

	投票した	投票しなかった
満足派	70	30
不満派	77	23

(%)

今回は、政治家信頼度との相関関係をみてみよう。「日本の政治家(国会議員、地方議員、首長)を考えた時、あなたは、政治家についてどんな印象を持っていますか」を問うた22年調査の結果は、「とても信頼できると思う」が3%、「ある程度信頼でき

と思う」が38%、「あまり信頼できない」が42%、「全く信頼できないと思う」が6%であった。

〔表10〕は、これらのうち、「とても信頼できると思う」+「ある程度信頼できると思う」=「信頼(信頼派)」、「あまり信頼できない」+「全く信頼できないと思う」=「不信(不信派)」としてまとめ、「投票した・しなかった」とのクロスを集計している。「投票率」は「信頼派」が69%、「不信派」が78%で、「不信派」の方が高い。政治への不満や政治家への不信感が、投票への動機付けに相応の関連を有していることが示唆される。

表 10. 「政治家についてどんな印象か」×「参議院議員選挙で投票したか」

	投票した	投票しなかった
信頼派	69	31
不信派	78	22

(%)

視点を変えてやや外挿するならば、自覚の有無は定かではないものの、「投票しない」というオプションは、政治に対する消極的ないし受動的肯定という脈絡で捉えられるのかもしれない。

1-3. 高校生非有権者の投票志向

さて、非有権者の高校生たちは、選挙についてどう受け止めているのだろうか。今回の調査対象の1年生～3年生全体(2,580人)のうち、18歳未満(2022年7月11日現在)の非有権者は2,316人で90%を占めた。うち、3年生の非有権者は559人であった。

非有権者高校生に「18歳になったら選挙の投票に行きますか」を聞いた結果は、〔表11〕にまとめた。年調査での「(投票に)行く」は68%と、これまでの5回中最も高い比率となった。1、2年生でも66%を占めている。

経年の結果を比較すると、常に2年生と3年生の値の間に明確な相違が存在しており、学齢の上昇による投票志向の高まりが示唆される。3年生の

表 11. 18歳になったら投票に行くか(非有権者)

	行く					行かない					わからない				
	16(参)	17(衆)	19(参)	21(衆)	22(参)	16(参)	17(衆)	19(参)	21(衆)	22(参)	16(参)	17(衆)	19(参)	21(衆)	22(参)
男性	59	59	56	62	66	4	6	4	3	4	33	33	38	33	28
女性	63	59	57	65	70	2	3	3	2	2	31	37	38	31	27
1年生	57	53	53	62	66	2	3	3	3	2	34	42	41	34	29
2年生	59	56	54	61	66	3	6	3	3	4	35	36	39	34	29
3年生	72	80	63	76	73	3	2	3	2	3	24	16	33	22	24
全体	61	59	56	64	68	3	4	3	3	3	32	35	38	32	28

(%)

非有権者にとって、同級生有権者の存在が相応の刺激になっているのであろう。

1-4. 高校生と選挙過程

ここからは、高校生全体について、選挙で見聞きしたもの、また、高校生が投票に行くようになるためには何が必要かなど、彼ら自身の認識を確認してみよう。

〔表12〕は、22年参院選をはじめとして、各回の国政選挙で「見たり聞いたりしたもの」をすべてあげてもらった結果を示している。経年の推移を確認すると、3つの傾向を読み取ることができよう。第一に、常時変わらず多数を占めているものとして、「掲示板にはられた候補者や政党のポスター」と「新聞やテレビの選挙報道番組」などが存在する。また、「選挙公報」が、常に3割程度という比較的高い比率を示していることも注目し値する。第二に、衆院選と参院選との間で相違がある事項、すなわち、衆院選時の方が参院選時に比べて値が高いものとして、「選挙カーの連呼」や「候補者や政党による駅や街頭での演説」などが存在する。これらの結果は、高校生にみられる特性というよりも、マス・メディアの報道や政党や政治家の選挙運動など、時宜の選挙過程と関連していると考えられる。

表 12. 衆院選で見聞きしたもの

	16(参)	17(衆)	19(参)	21(衆)	22(参)
「選挙公報」	26	32	28	31	34
候補者や政党の新聞広告	26	29	21	23	24
政党やテレビCM(コマーシャル)	35	49	30	42	43
新聞やテレビの選挙報道番組	53	67	41	53	51
政党や選挙のホームページ	4	4	6	5	
選挙管理委員会のホームページ					3
政党や政治家のホームページ					7
LINEやTwitterなどのSNS	22	25	23	25	33
YouTubeなどの動画サイト			18	17	27
掲示板にはられた候補者や政党のポスター	51	60	57	61	63
候補者や政党による駅や街頭での演説	45	60	48	56	49
候補者や政党のビラやパンフレット	19	23	20	24	19
インターネットのポトマッチ	4	2	2	4	5
選挙カーの連呼運動	47	66	58	65	54
どれも見たり聞いたりしなかった	2	2	6	3	3

(%)

第三に、近年の増加傾向が認められものとして、「LINE や Twitter などの SNS」、「YouTube などの動画サイト」が存在する。これらの 2 つは、わけても 22 年参院選における増加の度合いが顕著であり、今回の参院選で SNS を駆使した政党の選挙運動が注目を浴びたことと符合しよう。高校生の態度や行動は、社会のあり様を反映している。

次に、選挙に関して、「どのような環境であれば投票しやすいと思いますか」を 2 つまで選んでもらった結果を、[表 13] にまとめた。回答は、一貫して、「スマートフォンやパソコンから投票できる」と「自分の通う学校で投票できる」の二つに集中しており、とりわけ、「スマートフォンやパソコンからの投票」は 6 割以上を占めている。若者の低投票率傾向への有効な対策として、「スマホ投票」の導入が提唱される昨今だが、仮に「スマホ投票」という手段的必要条件が成就すれば、彼らの選挙への

関心や投票への志向性が、飛躍的に上昇するのだろうか。

選挙をめぐる制度的環境条件としては、さらに、選挙権年齢と被選挙権年齢の問題を取り上げたい。

[表 14] を参照されたい。2016 年の参院選から導入された「18 歳選挙権」に関連して、「18 歳という年齢で選挙権を持つのは早いと思いますか、それとも遅いと思いますか」を聞いた結果の経年推移を示している。5 割前後を占めていた「ちょうどいい」の比率が、21 年には 65% と顕著に増加し、22 年調査でも 64% と大多数を占めるに至った。19 年までは 2 割強を占めていた「早い」の割合も、21 年からは 1 割台に減少している。高校生の認知レベルにおける 18 歳選挙権の定着が読み取れよう。また、21 年からは、「わからない」比率の減少にみられるように、政治的な認識も若干上昇したように思われる。

被選挙権年齢についてはどうだろうか。[表 15] に目を転じられたい。選挙権年齢が 18 歳に引き下げられた一方で、被選挙権には変更がなく、都道府県知事や参議院議員が 30 歳以上、それ以外が 25 歳以上のままである。調査では「被選挙権年齢についてどうするべきだと思いますか」を聞いている。

「今のままでよい」とする消極的な意見が多数を占めているものの、21 年、22 年と若干減少し 5 割を下回るようになった。代わりに、「引き下げるべき

表 13. どのような環境ならば投票しやすいか

	16(参)	17(衆)	19(参)	21(衆)	22(参)
自分の通う学校で投票できる	53	47	46	53	52
自分がよく行く施設や店で投票できる	21	23	24	26	24
全国どこでも投票できる	20	15	16	11	12
朝早くから深夜まで投票できる	18	15	15	15	18
郵便で投票できる	4	6	7	9	7
スマートフォンやパソコンから投票できる	51	63	61	64	64
その他	1	1	-	0	0

(%)

表 14. 選挙権年齢は

	早い					ちょうどいい					遅い					わからない				
	16(参)	17(衆)	19(参)	21(衆)	22(参)	16(参)	17(衆)	19(参)	21(衆)	22(参)	16(参)	17(衆)	19(参)	21(衆)	22(参)	16(参)	17(衆)	19(参)	21(衆)	22(参)
男性	21	20	20	10	15	49	53	55	67	66	7	3	5	6	7	17	23	19	16	13
女性	23	27	26	16	19	47	44	49	64	63	2	2	3	3	3	26	27	22	17	16
1年生	22	24	20	12	17	50	43	54	65	64	7	3	5	5	6	18	30	20	18	14
2年生	25	23	23	16	15	44	50	53	62	67	2	2	3	6	4	26	24	21	17	14
3年生	19	25	26	13	18	50	51	49	67	61	3	2	3	3	5	23	22	21	15	16
全体	22	24	23	13	17	48	48	52	65	64	4	2	4	5	5	22	25	21	16	15

(%)

表 15. 被選挙権年齢は

	選挙権と同じ 18歳以上にすべきだ					引き下げるべきだが、 選挙権と同じ年齢まで 引き下げる必要はない					今のままでよい					わからない				
	16(参)	17(衆)	19(参)	21(衆)	22(参)	16(参)	17(衆)	19(参)	21(衆)	22(参)	16(参)	17(衆)	19(参)	21(衆)	22(参)	16(参)	17(衆)	19(参)	21(衆)	22(参)
男性	7	6	8	9	11	26	23	25	30	31	49	56	51	48	47	12	15	15	12	11
女性	4	3	4	6	4	25	24	27	30	33	53	55	52	49	49	16	18	16	15	14
1年生	7	4	5	6	8	25	26	26	27	34	53	52	55	51	46	12	18	13	15	12
2年生	4	5	6	9	6	27	21	25	31	30	50	57	53	45	52	16	17	15	15	12
3年生	6	4	6	8	9	24	23	26	34	33	51	58	48	46	44	14	15	19	11	14
全体	5	4	6	8	8	25	23	26	30	32	51	55	52	48	47	14	16	16	14	13

(%)

だが、選挙権と同じ年齢まで引き下げる必要はない」と「選挙権と同じ18歳以上に引き下げるべきだ」が徐々に増加しつつある。上記の2つの回答の合計を「引き下げ」派と定義すると、16年=30%→17年=27%→19年=32%→21年=38%へと上昇し、22年には40%を占めるに至った。

さて、高校生調査は、すべて同一の高校を対象に実施しており、調査の間隔も2016年から2022年の6年間で5回に及んでいる。すなわち、同一の学年集団(同一コホート)の、学齢の上昇に伴う意識の推移をトレースすることが可能となる。政治的社会化の軌跡にはかならない。

[表16]を参照されたい。18歳選挙権への評価について、コホートを基準に表示したものである。表中の丸印(○)で囲んだ集団の学齢の上昇による推移を、→で示している。例えば、16年時点での1年生は、17年に学年が1年上がって2年生になると、「(18歳で選挙権を持つのは)早い」とする比率が22%から23%に微増し、「ちょうどいい」とする比率は50%のままで変化のないことを確認できる。

これらの結果からは、学年の上昇や有権者年齢になることで、「ちょうどいい」とする肯定的評価が、程度の差こそあれ増加していることが読み取れよう。

被選挙権年齢の評価にかんする結果は、[表17]に示した。全体の推移では、「引き下げるべきだが、選挙権と同じ年齢まで引き下げる必要はない」という『条件付き引き下げ』の比率がやや上昇し、「今のままでよい」の割合がやや減少傾向にある。ただ、

表16. 選挙権年齢は〔コホート〕

	早い					ちょうどいい				
	16(参)	17(衆)	19(参)	21(衆)	22(参)	16(参)	17(衆)	19(参)	21(衆)	22(参)
男性	21	20	20	10	15	49	53	55	67	66
女性	23	27	26	16	19	47	44	49	64	63
1年生	22	24	20	12	17	50	43	54	65	64
2年生	25	23	23	16	15	44	50	53	62	67
3年生	19	25	26	13	18	50	51	49	67	61
全体	22	24	23	13	17	48	48	52	65	64

(%)

表18. 日本の政治を動かしているのはだれか

	国会議員					官僚					首相					国民一人一人					マスコミ				
	16(参)	17(衆)	19(参)	21(衆)	22(参)	16(参)	17(衆)	19(参)	21(衆)	22(参)	16(参)	17(衆)	19(参)	21(衆)	22(参)	16(参)	17(衆)	19(参)	21(衆)	22(参)	16(参)	17(衆)	19(参)	21(衆)	22(参)
1年生	23	20	21	27	29	9	12	12	14	10	14	15	14	12	11	25	20	21	19	22	8	10	12	11	8
2年生	24	19	23	31	25	8	11	13	14	14	15	16	15	10	11	18	18	18	15	18	12	14	12	12	13
3年生	20	21	22	26	27	8	9	14	25	15	18	22	12	9	11	13	12	14	10	15	10	19	14	14	11
全体	22	20	22	28	27	8	11	13	17	13	16	17	13	10	11	18	17	18	15	18	10	14	13	12	11

(%)

コホートに注目すると、『条件付きの引き下げ』、「今のままでよい」、どちらも学年の上昇にともなう顕著な変化は見受けられない。被選挙権年齢の引き下げのゆくえは、今後の社会のあり様次第というところだろうか。

表17. 被選挙権年齢は〔コホート〕

	引き下げるべきだが、選挙権と同じ年齢まで引き下げる必要はない					今のままでよい				
	16(参)	17(衆)	19(参)	21(衆)	22(参)	16(参)	17(衆)	19(参)	21(衆)	22(参)
男性	26	23	25	30	31	49	56	51	48	47
女性	25	24	27	30	33	53	55	52	49	49
1年生	25	26	26	27	34	53	52	55	51	46
2年生	27	21	25	31	30	50	57	53	45	52
3年生	24	23	26	34	33	51	58	48	46	44
全体	25	23	26	30	32	51	55	52	48	47

(%)

2. 政治意識・政治イメージ

2-1. 政治を動かしているもの

ここからは、高校生の政治意識や政治イメージについて確認して行きたい。

まず、「日本の政治を動かしているのは誰だと思いますか」と聞き、ひとつだけ選択してもらった結果を取り上げてみよう。政治主体に関する認識に相当する。

[表18]を参照されたい。経年の推移をみると、「国会議員」の比率が2割強を占め続けている。加えて、「国会議員」は21年以降、若干増加傾向にある。これに対して、「首相」の比率には、16、17年の16~17%から21、22年の10%~11%へと、減少傾向が見受けられる。安倍氏から菅・岸田氏への交代が関わっているのかもしれない。

一方、「国民一人一人」の比率は、一貫して1割台後半で変化はみられない。先に触れたように、18歳選挙権を評価する比率の上昇や、非有権者高校生における投票志向の増加傾向などが存在したものの、「国民一人一人」の比率に変わりはない。政治主体に関する認識というのは、投票行動や投票へ

の動機付けとは連動することのない、次元を異にする事柄なのだろうか。

コホートで確認してみよう。「国民一人一人」に焦点をしばって、[表 19] にまとめた。16 年の 1 年生は 17 年に 2 年生に上がると、「国民一人一人」を選択する比率が 25%から 18%に、16 年の 2 年生は 17 年に 3 年生になると 18%から 12%へと、それぞれ比率を減少させている。同様に、17 年の 1 年生は 19 年には 3 年生となることで、20%から 14%に減少させ、19 年の 1 年生は 21 年に 3 年生に上がることで、21%から 10%へと減少させている。21 年から 22 年を比較すると、学齢の上昇にともなう比率の変化は見受けられない。21 年 11 月と 22 年 7 月のインターバルが、わずか 8 か月余りに過ぎないからかもしれない。ただ、比率に変化がないというだけであって、上昇はみられない。

いずれにせよ、学年の階段を上がるごとに比率が減少していくという、加齢による明確な減退効

果、より正確に表現するならば、逆年功効果が存在している。しかも、18 選挙権評価の上昇や、投票志向の増加などの時勢(時制)効果とは、相矛盾する現象にはかならない。

高校生たちは高校生生活の過程で、政治的有効性感覚の低減という、マイナスの政治的社会化を繰り返しているのだろうか。

2-2. 政治満足度

次に、政治満足度と政治家信頼度を取り上げたい。「現在の政治に対してどの程度満足しているか」を、4段階の評価で選択してもらった結果は[表 20] にまとめた。一見して、「だいたい満足している」の比率が明確な増加傾向にあることがわかる。

「大いに満足している」と「だいたい満足している」の合計を「満足」、「やや不満足である」と「大いに不満足である」の合計を「不満足」として、経年の推移を確認してみよう。「満足」の比率は、16 年=26%、17 年=30%、19 年=37%、21 年=42%、22 年=46%で、6 年間で 20 ポイントも増加している。「不満足」比率も、「満足」比率ほどではないものの、16 年の 48%から 22 年の 34%へと、直線的な減少傾向を示している。

2-3. 政治家信頼度

政治家信頼度をみてみよう。[表 21] を参照されたい。「日本の政治家を考えた時、あなたは、政治家についてどんな印象を持っていますか」と聞き、

表 19. 日本の政治を動かしているのはだれか
〔コホート〕

	国民一人一人				
	16(参)	17(衆)	19(参)	21(衆)	22(参)
1年生	25	20	21	19	22
2年生	18	18	18	15	18
3年生	13	12	14	10	15
全体	18	17	18	15	18

(%)

表 20. 政治満足度

	大いに満足している					だいたい満足している					やや不満足である					大いに不満足である					わからない				
	16(参)	17(衆)	19(参)	21(衆)	22(参)	16(参)	17(衆)	19(参)	21(衆)	22(参)	16(参)	17(衆)	19(参)	21(衆)	22(参)	16(参)	17(衆)	19(参)	21(衆)	22(参)	16(参)	17(衆)	19(参)	21(衆)	22(参)
男性	1	3	4	4	4	25	32	36	38	44	37	30	26	31	29	11	9	9	6	8	18	24	24	20	15
女性	0	2	2	2	3	25	26	32	41	45	38	35	32	33	27	10	6	7	4	4	25	31	27	20	21
1年生	—	2	3	3	4	25	26	37	42	45	39	32	30	30	26	10	8	5	4	6	22	31	25	21	19
2年生	0	3	3	3	3	29	30	33	36	47	36	28	29	31	26	7	7	8	7	6	24	32	27	22	18
3年生	2	2	3	3	4	21	29	32	39	40	37	40	28	33	32	14	7	10	6	7	20	22	26	17	18
全体	1	2	3	3	4	25	28	34	39	44	37	33	29	31	28	11	7	8	5	6	22	28	26	20	18

(%)

表 21. 政治家信頼度

	とても信頼できると思う					ある程度信頼できると思う					あまり信頼できないと思う					全く信頼できないと思う					わからない				
	16(参)	17(衆)	19(参)	21(衆)	22(参)	16(参)	17(衆)	19(参)	21(衆)	22(参)	16(参)	17(衆)	19(参)	21(衆)	22(参)	16(参)	17(衆)	19(参)	21(衆)	22(参)	16(参)	17(衆)	19(参)	21(衆)	22(参)
男性	1	2	3	3	3	19	24	30	34	38	51	50	45	44	40	14	12	9	8	8	8	11	12	10	10
女性	0	1	1	1	2	17	18	26	32	38	57	57	51	50	45	11	8	7	5	3	13	16	14	11	11
1年生	1	2	1	2	3	18	22	31	40	39	55	51	49	41	40	11	9	7	5	6	11	16	12	12	12
2年生	0	1	3	3	2	20	20	27	29	41	55	52	49	48	42	9	12	8	8	5	12	15	13	12	10
3年生	1	2	2	2	3	16	20	26	30	33	53	60	48	51	46	16	8	10	8	7	9	10	15	8	12
全体	1	1	2	2	3	18	21	28	33	38	54	54	48	46	42	12	10	8	7	6	11	14	13	11	11

(%)

4段階で評価してもらった結果をまとめたものである。政治家信頼度にかんしても、「ある程度信頼できると思う」とする肯定的な受け止め方が顕著に増加している。

「とても信頼できると思う」+「ある程度信頼できる」を「信頼」、「あまり信頼できないと思う」+「全く信頼できないと思う」を「不信」と定義し、経年結果を確認すると、「信頼」比率は、16年=19%、17年=22%、19年=30%、21年=35%、22年=41%と、6年間で22ポイントも増加している。これに対して、「不満足」は、16年には66%で大多数を占めていたが、比率を直線的に減少させて、22年には48%と、50%を下回るに至った。

過去の調査結果からは、高校生の政治意識の特性として、政治家不信の高さを確認することができた。すなわち、高校生が政治を認知する起点は、政治家のネガティブ・イメージにあるのではないかと推測された。まさに、「スキャンダルや不祥事など、メディア、とりわけSNSを含む映像メディアを通じた政治家の姿が、彼らにとってのリアルな政治との遭遇のように思われた」（松本正生、2020、p. 22）。しかしながら、こうした見立ては、修正を迫られつつあるように思われる。

2-4. マイナスからプラスへ：イメージ変容か

政治満足度と政治家信頼度について、変化の位相をさらに詳しく観察してみたい。

まず、政治満足度を取り上げる。「満足」から「不満足」を差し引いた比率を算出したものが、[表 22]の「差し引きポイント表」である。16年にはマイナス 22 ポイントで「不満足」派が優勢だったが、17年はマイナス 10 ポイント、19年には±0に変化し、21年にはプラス 5 ポイントへと反転し、22年にはプラス 14 と、6年間で、絶対値にして 36 ポイントの変動に相当する。

表 22. 「政治満足」－「政治不満」差し引きポイント

	16(参)	17(衆)	19(参)	21(衆)	22(参)
1年生	-24	-11	+5	+10	+17
2年生	-14	-2	-1	+1	+18
3年生	-28	-16	-3	+3	+5
全体	-22	-10	±0	+5	+14

加えて、21年の結果においては、1年生(+10)と2,3年生(+1, +3)との間に、やや大きな相違が存在していた。1年後の22年結果には、1,2年生

(+17, +18)と3年生(+5ポイント)間の相違へと転じている。21年時点の1年生を起点とする、新たな世代の登場という、世代的要因が加わるようになったのかもしれない。

政治家に対する印象として、「とても信頼できると思う」と「ある程度信頼できる」を合計した「信頼」比率から、「あまり信頼できないと思う」と「全く信頼できないと思う」を合計した「不信」比率を差し引いた値は、[表 23]に示した。

高校生の政治家イメージは、16年がマイナス 47 ポイント、17年がマイナス 42 ポイントと、極めて高い不信を示していた。ところが、マイナスの度合いは、19年に 26 ポイント、21年に 18 ポイントへと直線的に減少し、22年には 7 ポイントと一桁に激減している。6年間の減少度は 40 ポイントに達する。5回を数える当該高校生調査の継続質問結果の中で、最も大きな変化に相当する。

表 23. 「政治家信頼」－「政治家不信」差し引きポイント

	16(参)	17(衆)	19(参)	21(衆)	22(参)
1年生	-47	-36	-24	-4	-4
2年生	-44	-43	-27	-24	-4
3年生	-52	-46	-30	-27	-17
全体	-47	-42	-26	-18	-7

先にも引用したように、政治家へのマイナス・イメージが、高校生の政治的社会化(ないし政治的認知)の起点になっているという仮説は、変更を余儀なくされていると言わざるを得ない。ならば、その要因は何なのか。

時勢(時制)的要因の寄与するところが大きいという推測が成り立ち得るようにも思われる。高校生の意識変容は、この期間に生じた、いかなる時代ないし社会の変化とシンクロしているのだろうか。

先の政治満足度と同様に、政治家信頼度にかんする21年の差し引きポイントには、1年生の値(-4ポイント)と2年生(-24ポイント)・3年生(-27ポイント)の値の間に顕著な相違が存在していた。22年結果をみると、相違は、1,2年生(双方とも-4ポイント)と3年生(-17ポイント)の間にシフトしている。

新たな世代の登場という要素が介在するようになったと解釈すべきであろう。21年時点の高校1年生に続く新世代の若者たちは、今後、どのようなパフォーマンスを披露してくれるのだろうか。

3. 情報行動

3-1. ニュース視聴度

ここからは、高校生の情報行動について、「社会や政治のニュース」を視聴するメディアとその頻度を指標に、テレビ、新聞、インターネットの順で見ていきたい（注2）。

〔表24〕は、「テレビで社会や政治のニュースをどの程度見るか」を聞いた結果を示している。経年の結果をみると、「毎日見ている」の比率がほぼ3割で推移し、これに「週に2,3回見ている」を合計した比率は、17年=62%、19年=64%、21年=71%、22年=67%と、大多数を占めている。「全く見ない」の割合が、常に6~7%にとどまることから、世間で共有される社会の情報は、テレビおよびテレビ・ニュースが媒体となっていることが読み取れる。社会の公共財としての、テレビの役割が示唆されよう。

新聞で社会や政治のニュースを読む度合いの経年結果は、〔表25〕にまとめた。テレビとは異なり、

新聞を「毎日読んでいる」比率は、2~3%に過ぎない。「週に2,3回読んでいる」を合計しても、ひとケタにとどまる。これに対して、「全く読まない」比率は、ほぼ6割に及んでいる。「毎日読んでいる」+「週に2,3回読んでいる」=「読む」比率と、「あまり読まない」+「全く読まない」=「読まない」比率との大小関係は、17年=8%（「読む」）-88%（「読まない」、以下同じ）、19年=8%-87%、21年=10%-87%、22年=9%-87%となり、高校生の新聞（紙）ばなれに、局面の変化は見込めない。

続いて、インターネットで社会や政治のニュースを見る度合いの推移を確認してみよう。〔表26〕を参照されたい。「毎日見ている」、および「週に2,3回見ている」ともに、明確な増加傾向を示している。「見ない」については、「あまり」ではなく「全く」の方が顕著に減少している。

「毎日見る」+「週に2,3回見る」=「見る」と「あまり見ない」+「全く見ない」=「見ない」の比率を比較すると、17年=28%（「見る」）-68%（「見

表 24. テレビで政治のニュースをどの程度見るか

	毎日見ている				週に2,3回見ている				あまり見ない				全く見ない			
	17(衆)	19(参)	21(衆)	22(参)	17(衆)	19(参)	21(衆)	22(参)	17(衆)	19(参)	21(衆)	22(参)	17(衆)	19(参)	21(衆)	22(参)
男性	29	31	33	28	34	33	36	37	26	24	22	26	6	7	7	7
女性	27	29	37	33	34	34	37	36	29	29	20	26	7	7	5	4
1年生	23	31	34	28	33	35	36	37	32	25	22	27	8	6	5	6
2年生	26	30	37	28	32	33	36	38	29	26	20	26	9	7	6	5
3年生	35	29	34	33	36	32	36	35	23	28	21	24	4	7	7	5
全体	28	30	35	30	34	34	36	37	28	27	21	26	7	7	6	6

(%)

表 25. 新聞で社会や政治の記事を読むか

	毎日読んでいる				週に2,3回読んでいる				あまり読まない				全く読まない			
	17(衆)	19(参)	21(衆)	22(参)	17(衆)	19(参)	21(衆)	22(参)	17(衆)	19(参)	21(衆)	22(参)	17(衆)	19(参)	21(衆)	22(参)
男性	4	3	4	2	8	8	8	8	26	28	28	31	57	54	57	55
女性	0	2	2	2	4	4	7	6	23	28	26	27	69	63	63	63
1年生	2	3	2	2	5	6	8	7	22	28	28	30	66	59	59	59
2年生	1	2	4	2	5	6	7	7	25	28	28	29	64	60	59	59
3年生	2	3	3	3	8	5	7	7	26	27	25	28	62	59	61	59
全体	2	2	3	2	6	6	7	7	24	28	27	29	64	59	60	59

(%)

表 26. インターネットで社会や政治のニュースを見るか

	毎日見ている				週に2,3回見ている				あまり見ない				全く見ない			
	17(衆)	19(参)	21(衆)	22(参)	17(衆)	19(参)	21(衆)	22(参)	17(衆)	19(参)	21(衆)	22(参)	17(衆)	19(参)	21(衆)	22(参)
男性	12	14	18	18	25	30	32	37	35	34	34	32	25	17	14	10
女性	4	9	12	13	19	25	29	36	39	43	40	39	36	21	16	11
1年生	5	10	13	15	18	26	30	34	40	39	38	38	33	21	16	12
2年生	5	12	17	15	21	27	31	40	38	39	35	33	34	19	15	10
3年生	12	12	16	18	26	28	32	36	34	38	38	34	26	17	13	10
全体	7	11	15	16	21	27	31	36	37	39	37	35	31	19	15	11

(%)

ない」、以下同じ)、19年=38%-58%、21年=46%-52%と推移し、22年には52%-46%で、「見る」派が「見ない」派を逆転するに至った。

3-2. 情報源

さて、21年調査からは、情報源に関する質問を19年調査までと大幅に変更している。[表27]を参照されたい。「自分の携帯やタブレットで、社会や政治のニュースの情報源としてよく利用するもの」を、1つだけ選んでもらった結果を示している。

「LINE ニュース」、「ニュースアプリ (Yahoo!ニュース、スマートニュース、グノシーなど)」、「Twitter」にほぼ三分されることが確認できよう。

ただ、全体の比率にはほとんど変化が見受けられないものの、21年と22年の結果を詳しく観察すると、わずか8か月余の間の、高校生たちの情報行動の変化を読み取ることが出来る。例えば、同一集団(コホート)を基準に追跡すると、21年の1年生は、8か月後(2年生)に「Twitter」が22%→27%に増加し、「LINE ニュース」が25%→21%に減少してい

る。同じく、21年の2年生も、8か月後(3年生)には「Twitter」が26%→29%に増加し、「LINE ニュース」が27%→22%に減少している。「LINE ニュース」から「Twitter」にシフトした人たちが一定数存在することを、うかがい知ることができよう。彼らの情報源、ひいては情報行動は、日々刻々と変化しているに違いない。

さらに、上記の情報源のうち「信頼する情報源はどれか」を複数選んでもらうと、[表28]のようになる。21年、22年とも「ニュースアプリ」が44%、46%で突出して高い値を示している。一方、「テレビ局の動画ニュースサイト」や「新聞社の動画ニュースサイト」は、情報源としてはわずか4%、1~2%にとどまっているものの、信頼度については、「テレビ局の動画ニュースサイト」が27%(21年)・31%(22年)、「新聞社の動画ニュースサイト」が23%(21年および22年)と、相応の割合を占めていることも注目に値する。利用度や接触度とは別に、いわゆるオールド・メディアの情報に対する高校生たちの信頼度合いには、やや心強い思いを禁じ得ない。

表 27. 携帯やタブレットで社会や政治のニュースの情報源としてよく利用するもの

	Twitter		LINEニュース		YouTube内の ニュース動画		ニュースアプリ (Yahoo! ニュース、スマート ニュース、グノシー など)		新聞社の動画 ニュースサイト (各社 のサイトや NewsVideo など)		テレビ局の動 画ニュースサ イト		動画サービス (Hulu、 Gyao! など)		その他	
	21(衆)	22(参)	21(衆)	22(参)	21(衆)	22(参)	21(衆)	22(参)	21(衆)	22(参)	21(衆)	22(参)	21(衆)	22(参)	21(衆)	22(参)
男性	21	24	20	17	11	14	29	26	2	2	4	5	0	1	2	1
女性	23	26	36	29	5	5	21	24	1	1	3	3	0	0	2	2
1年生	22	20	25	25	9	9	26	29	2	1	4	3	0	1	2	2
2年生	26	27	27	21	9	9	24	24	1	2	4	5	0	0	2	2
3年生	21	29	32	22	7	12	26	21	1	1	3	4	0	0	2	1
全体	23	25	28	23	8	10	25	25	2	1	4	4	0	0	2	2

(%)

表 28. 信頼する情報源

	Twitter		LINEニュース		YouTube内の ニュース動画		ニュースアプリ (Yahoo! ニュース、スマート ニュース、グノシー など)		新聞社の動画 ニュースサイト (各社 のサイトや NewsVideo など)		テレビ局の動 画ニュースサ イト		動画サービス (Hulu、 Gyao! など)		その他	
	21(衆)	22(参)	21(衆)	22(参)	21(衆)	22(参)	21(衆)	22(参)	21(衆)	22(参)	21(衆)	22(参)	21(衆)	22(参)	21(衆)	22(参)
男性	13	13	24	20	15	16	43	45	21	19	23	27	2	2	6	8
女性	9	7	29	25	7	8	45	49	27	28	30	36	2	2	5	5
1年生	13	10	27	24	13	13	47	49	26	25	31	37	3	3	6	6
2年生	12	10	27	22	11	13	43	47	22	24	24	29	2	2	5	7
3年生	9	10	25	21	9	10	42	43	22	19	25	26	1	1	7	7
全体	11	10	26	22	11	12	44	46	23	23	27	31	2	2	6	7

(%)

最後に、情報源と政治満足度、政治家信頼度との関係を確認しておきたい。〔表 29〕を参照されたい。社会や政治のニュースの情報源別に、政治満足度を算出した結果に相当する。「大いに満足している」と「大いに満足している」を合計した「満足」比率は、利用頻度の高い情報源を選んだ人たちに比べて、「YouTube 内のニュース動画」や「テレビ局のニュースサイト」などを情報源とする人たちの方が、やや低めの値を示している。

政治家満足度とのクロス集計結果は、〔表 30〕に示した。政治満足度と同じく、「YouTube 内のニュース動画」、「テレビ局のニュースサイト」、「新聞社の動画ニュースサイト」を情報源とする少数派の高校生の方が、政治家信頼度が低い、言い換えれば、不信度が高いという傾向を読み取ることができる。

ここで、先に「投票した・しなかった」の弁別要素を確認した際、政治満足度や政治家信頼度と投票志向との関連が読み取れたこと（〔表 9〕・〔表 10〕）を想起されたい。情報源（ないしニュース・ソース）を媒介とする、政治満足度・政治家信頼度－投票志向間の関係性（逆相関関係）が類推されるだろう。

若干の外挿が許されるならば、大人と同じニュース（ニュース・ソース）に接する人たちは、政治に

対する批判的態度を共有しているという解釈が成り立ち得るようにも思われる。

まとめにかえて

ここまで、22 年参院選の直後に実施した、「さいたま市高校生政治意識調査」の結果を中心に、高校生の投票態度、政治意識・政治イメージ、情報行動などを確認してきた。

16 年から 22 年まで、5 回の調査結果を概観すると、第一に、経年変化の大きい事項として、「政治満足度」と「政治家信頼度」が注目された。不満や不信の度合いが年とともに減少し、従来の高校生にみられた政治不満や政治家不信が解消されつつあった。マイナスからプラスへ、高校生の政治意識や政治イメージには、明らかに変容の兆候が見受けられる。

変容には、社会における時勢（時制）的要素の寄与するところが大きいと推測される。高校生の意識変容には、この期間に生じた、いかなる時代ないし社会の変化が介在し、どのようにシンクロしているのだろうか。

第二は、情報源・情報行動と投票行動・政治意識との間に、関係性の存在が類推されることである。

表 29. 「社会や政治のニュースの情報源」 × 「政治に対してどの程度満足しているか」

	Twitter	LINEニュース	YouTube内の ニュース動画	ニュースアプリ (Yahoo! ニュース、スマート ニュース、グノ シーなど)	新聞社の動画 ニュースサイト (各社のサイトや NewsVideo など)	テレビ局の動画 ニュースサイト
満足 (大いに満足している + 大いに満足している)	46	55	39	50	50	42
不満 (やや不満である + 大 いに不満である)	35	27	42	32	44	40
わからない	18	18	20	18	6	18
全体	100	100	100	100	100	100

(%)

表 30. 「社会や政治のニュースの情報源」 × 「政治家についてどんな印象か」

	Twitter	LINEニュース	YouTube内の ニュース動画	ニュースアプリ (Yahoo! ニュース、スマート ニュース、グノ シーなど)	新聞社の動画 ニュースサイト (各社のサイトや NewsVideo など)	テレビ局の動画 ニュースサイト
信頼 (とても信頼できると思う + ある程度信頼できると思う)	40	45	34	42	36	36
不信 (あまり信頼できないと思う + 全く信頼できないと思う)	49	45	54	46	56	46
わからない	11	10	12	11	8	18
全体	100	100	100	100	100	100

(%)

高校生が政治のニュースや社会の情報を入手するのは、スマートフォンのアプリケーションが媒介している。ただ、情報入手のツールは同じであっても、アプリケーション、あるいは、コンテンツに応じて、政治満足度や政治家信頼度、ひいては投票への志向性に微妙な位相の存在することがうかがわれた。

加えて、彼らの情報源アプリやコンテンツは、日々刻々変化しており、意識や態度にかんするタイプ分けには困難さがともなう。ましてや、何らかの一般化はさらに難しい。未来への外挿は断念し、継続調査の結果を記録し続けて後付けの解釈を行うことが、精々のところかもしれない。

高校生たちは、2020 年来続く「コロナ禍社会」での生活を余儀なくされている。コロナという不可抗力現象に遭遇したことが、高校生の政治的社会化にどのようなインパクトをもたらしたのか。今後も継続して調査を実施していきたい。

(埼玉大学社会調査研究センター)

(注)

1) 2022 年の「さいたま市高校生政治意識調査」の回答者の構成は〔表 31〕にまとめた。

なお、過去 4 回の「さいたま市高校生政治意識調査」の詳細は以下の通りである。21 年調査は、21 年衆院選直後の 11 月に、さいたま市の市立高等学校 3 校（浦和高等学校、浦和南高等学校、大宮北高等学校）の全校生徒（1～3 年生）を対象に実施し、回答者総数 2,652 名であった。19 年調査は、19 年 9 月に、さいたま市の市立高等学校 4 校（浦和高等学校、浦和南高等学校、大宮北高等学校、大宮西高等学校）の全校生徒（1～3 年生）を対象に実施し、回答者総数 2,962 名であった。2017 年調査は、同じくさいたま市の市立高等学

表 31. 回答者の構成 (2022 高校生調査)

男性	50% (1287)
女性	48% (1232)
答えない	2% (61)
1年生	35% (902)
2年生	33% (855)
3年生	32% (823)
全体	100% (2580)

(N)

校 4 校の 1～3 年生を対象に 17 年 10 月に実施し、回答者数は 1,341 名であった。2016 年調査は、同様に、さいたま市の市立高等学校 4 校の 1～3 年生を対象として 16 年 7 月に実施し、回答者数は 948 名であった。5 回の調査は、いずれも、クラス単位で調査票を配付し回収する集合調査法を採用した。なお、大宮西高等学校にかんしては、2019 年度に閉校となったため、21 年以降の調査の対象校には入っていない。

調査の実施に際しては、さいたま市教育委員会のご協力を頂戴した。対象となった各学校の関係者のみなさま、とりわけ、タイトな授業日程にもかかわらず、無理なお願いを聞き入れてくださった各高校の校長先生には、深く感謝する次第である。あわせて、回答してくれた高校生にも御礼を申し述べたい。

2) 16 年調査と 17 年以降の調査とでは、選択肢のワードにかんして、「1. ほぼ毎日見て(読んで)いる」(16 年)と「1. 毎日見て(読んで)いる」(17 年以降)の、さらに、「2. 週に 1 回以上見て(読んで)いる」(16 年)と「2. 週に 2, 3 回見て(読んで)いる」(17 年以降)の相違が存在する。したがって、ここでは、17 年以降の結果を採用した。

(参考文献・資料)

- 松本正生 (2016) 「18 歳選挙権と『選挙ばなれ社会』—さいたま市高校生政治意識調査から—」『政策と調査』第 10 号, 2016. 2
- 松本正生 (2017) 「子どもから大人へ、政治意識と社会化環境 —中学生・高校生・有権者調査—」『政策と調査』第 12 号, 2017. 3
- 松本正生 (2018) 「『18 歳選挙権』、参院選(2016)～衆院選(2017)へ —高校生政治意識調査から—」『政策と調査』第 14 号, 2018. 3
- 松本正生 (2020) 「『不満もなく、関心もなく』、政治を意識しない若者たち—高校生政治意識調査(2016・17・19)から—」『政策と調査』第 18 号, 2020. 3
- 松本正生 (2022) 「コロナ禍選挙と若者の政治的社会化—さいたま市高校生政治意識調査(2016・17・19・21)から—」『政策と調査』第 21 号, 2022. 2

「高校生の選挙・政治に関する意識調査」2022年7月

埼玉大学社会調査研究センターでは、さいたま市教育委員会の協力により、さいたま市の市立高等学校3校（浦和高等学校、浦和南高等学校、大宮北高等学校）に在籍する1～3年生のみなさんを対象に、選挙や政治に関する意識調査を実施することになりました。みなさんのプライバシーに配慮し、回答結果は統計的に処理します。

お名前は記入しないようにお願いします。

この下の Q1 からお答えください

Q1. あなたは、今年の7月11日の時点で「満18歳」になっていましたか。番号に○をつけてください。

- 1. なっていた 10%
- 2. なってなかった(Q1Eに進んで下さい)90%

「1. なっていた」と回答した人への質問

Q1A. あなたは、7月10日に実施された参議院議員選挙で投票しましたか。番号に○をつけてください。

- 1. 投票した 71%
- 2. 投票しなかった (Q1Fに進んでください) 29%

「1. 投票した」と回答した人への質問

Q1B. 投票日当日に投票しましたか、それとも期日前投票（または不在者投票）をしましたか。番号に○をつけてください。

- 1. 当日投票をした 82%
- 2. 期日前投票（不在者投票）をした 17%

Q1C. あなたは、どなたと投票に行きましたか。1つ選んで番号に○をつけてください。

- 1. 1人で 20%
- 2. 家族と 80%
- 3. その他（具体的に： ） 1%

Q1D. あなたは、選挙区の立候補者の中で誰を選ぶか決める時、候補者の所属する政党を重視して投票しましたか。それとも候補者個人を重視して投票しましたか。1つ選んで番号に○をつけてください。

- 1. 政党を重視して 52%
- 2. 候補者個人を重視して 28%
- 3. どちらともいえない 14%
- 4. わからない 6%

「2. なってなかった」と回答した人への質問

Q1E. あなたは、18歳になったら選挙投票に行きますか。1つ選んで番号に○をつけてください。

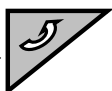
- 1. 行く 68%
 - 2. 行かない 3%
 - 3. わからない 28%
- } (次のページのQ2に進んでください)

「2. 投票しなかった」と回答した人への質問

Q1F. あなたが投票しなかったのは、なぜですか。あてはまるものを2つまで選んで、番号に○をつけてください。

- 1. 他の用事（勉強や部活など）があったから 63%
- 2. 病気や体調が良くなかったから 4%
- 3. 投票所が遠かったから 5%
- 4. 面倒（めんどう）だったから 13%
- 5. 選挙に関心がなかったから 11%
- 6. 誰を（どの政党）を選んでいいのかよくわからなかったから 30%
- 7. 自分一人が投票しても意味がないから 1%
- 8. その他（ ） 8%

次のページの Q2に進んでください



ここからは全員への質問です

Q2. 今回の参議院議員選挙で、あなたが見たり聞いたりしたものが下の中にありますか。あればすべて選んで番号に○をつけてください。

1. 「選挙公報」 34%
2. 候補者や政党の新聞広告 24%
3. 政党のテレビCM（コマーシャル） 43%
4. 新聞やテレビの選挙報道番組 51%
5. 選挙管理委員会のホームページ 3%
6. 政党や政治家のホームページ 7%
7. LINE や Twitter（ツイッター）などのSNS 33%
8. YouTube などの動画サイト 27%
9. 掲示板にはられた候補者や政党のポスター 63%
10. 候補者や政党による駅や街頭での演説 49%
11. 候補者や政党のビラやパンフレット 19%
12. インターネットのポータルマッチ 5%
13. 選挙カーの連呼運動 54%
14. どれも見たり聞いたりしなかった 3%

Q3. あなたは、どのような環境であれば投票しやすいと思いますか。あてはまるものを2つまで選んで番号に○をつけてください。

1. 自分の通う学校で投票できる 52%
2. 自分がよく行く施設や店で投票できる 24%
3. 自分が住んでいる所だけでなく、全国どこの投票所でも投票できる 12%
4. 朝早くから深夜まで投票できる 18%
5. 郵便で投票できる 7%
6. スマートフォンやパソコンから投票できる 64%
7. その他 () 0%

Q4. あなたがこれまで経験した選挙に関する授業やイベント（行事）で印象に残っているものはありますか。あてはまるものを2つまで選んで○をつけてください。

1. 学校での授業 39%
2. 選挙出前講座・模擬投票 18%
3. 明るい選挙啓発ポスターコンクール 6%
4. 生徒会・学級委員などの選挙 37%
5. 国会・県議会などの議事堂見学 34%
6. その他 () 0%
7. 特になし 17%

Q5. 「選挙権」が認められるのは満18歳からです。18歳という年齢で選挙権を持つのは早いと思いますか。それとも遅いと思いますか。1つ選んで番号に○をつけてください。

1. 早い 17%
2. ちょうどいい 64%
3. 遅い 5%
4. わからない 15%

Q6. 一方、選挙に立候補できる「被選挙権」は、都道府県知事と参議院議員では30歳以上、それ以外では25歳以上となっています。あなたは、被選挙権についてどうすべきだと思いますか。1つ選んで番号に○をつけてください。

1. 選挙権と同じ18歳以上にすべきだ 8%
2. 引き下げるべきだが、選挙権と同じ年齢まで引き下げる必要はない 32%
3. 今のままでよい 47%
4. わからない 13%

Q7. あなたは、子どものころ、親といっしょに投票所に行ったことがありますか。1つ選んで番号に○をつけてください。

1. ある 54%
2. ない 37%
3. わからない 9%

次に右上のQ8に進んでください

Q8. あなたは、国の政治にどの程度関心がありますか。
1つ選んで番号に○をつけてください。

1. 非常に関心がある 10%
2. ある程度関心がある 58%
3. あまり関心がない 26%
4. 全く関心がない 3%
5. わからない 3%

Q9. あなたは、自分自身の生活と政治とはどの程度関係していると思いますか。
1つ選んで番号に○をつけてください。

1. 非常に関係している 32%
2. ある程度関係している 53%
3. あまり関係していない 9%
4. 全く関係していない 1%
5. わからない 5%

Q10. あなたは、現在の生活にどの程度満足していますか。
1つ選んで番号に○をつけてください。

1. 大いに満足している 15%
2. だいたい満足している 68%
3. やや不満足である 12%
4. 大いに不満足である 1%
5. わからない 4%

Q11. あなたは、現在の政治に対してどの程度満足していますか。
1つ選んで番号に○をつけてください。

1. 大いに満足している 4%
2. だいたい満足している 44%
3. やや不満足である 28%
4. 大いに不満足である 6%
5. わからない 18%

Q12. 日本の政治家（国会議員、地方議員、首長）を考えた時、あなたは、政治家についてどんな印象を持っていますか。
1つ選んで番号に○をつけてください。

1. とても信頼できると思う 3%
2. ある程度信頼できると思う 38%
3. あまり信頼できないと思う 42%
4. 全く信頼できないと思う 6%
5. わからない 11%

Q13. あなたは、家族と政治の話をすることがありますか。
1つ選んで番号に○をつけてください。

1. よくある 13%
2. ときどきある 45%
3. あまりない 26%
4. ほとんどない 16%

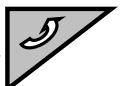
Q14. あなたは、友人と政治の話をすることがありますか。
1つ選んで番号に○をつけてください。

1. よくある 4%
2. ときどきある 21%
3. あまりない 36%
4. ほとんどない 39%

Q15. 今の日本の政治を実際に動かしているのは誰だと思いますか。
1つ選んで番号に○をつけてください。

1. 国会議員 27%
2. 官僚 13%
3. 首相 11%
4. 国民一人一人 18%
5. 大企業 5%
6. マスコミ 11%
7. その他 () 1%
8. わからない 12%

次のページの Q16 に進んでください



Q16. あなたは、テレビ、新聞、インターネットで、社会や政治のニュースをどの程度見たり、読んだりしますか。
それぞれ1つ選んで番号に○をつけてください。

A. テレビで社会や政治のニュースを見る

1. 毎日見ている 30%
2. 週に2、3回見ている 37%
3. あまり見ない 26%
4. 全く見ない 6%
5. わからない 2%

B. 新聞で社会や政治の記事を読む

1. 毎日読んでいる 2%
2. 週に2、3回読んでいる 7%
3. あまり読まない 29%
4. 全く読まない 59%
5. わからない 3%

C. インターネットで社会や政治のニュースを見る

1. 毎日見ている 16%
2. 週に2、3回見ている 36%
3. あまり見ない 35%
4. 全く見ない 11%
5. わからない 2%

Q17. あなたが自分の携帯やタブレットで、社会や政治のニュースの情報源としてよく利用するのはどれですか。
1つ選んで番号に○をつけてください。

1. Twitter 25%
2. LINE ニュース 23%
3. YouTube 内のニュース動画 10%
4. ニュースアプリ 25%
- (Yahoo!ニュース、スマートニュース、グノシーなど)
5. 新聞社の動画ニュースサイト 1%
- (各社のサイトやNewsVideo など)
6. テレビ局の動画ニュースサイト 4%
7. 動画サービス (Hulu、Gyao! など) 0%
8. その他 () 2%

Q18. この中で、あなたが信頼する情報源はどれですか。
すべて選んで番号に○をつけてください。

1. Twitter 10%
2. LINE ニュース 22%
3. YouTube 内のニュース動画 12%
4. ニュースアプリ 46%
- (Yahoo!ニュース、スマートニュース、グノシーなど)
5. 新聞社の動画ニュースサイト 23%
- (各社のサイトやNewsVideo など)
6. テレビ局の動画ニュースサイト 31%
7. 動画サービス (Hulu、Gyao! など) 2%
8. その他 () 7%

F 1. あなたは男性ですか、女性ですか。

1. 男性 50%
2. 女性 48%
3. 答えない 2%

F 2. あなたは何年生ですか。

1. 1年生 35%
2. 2年生 33%
3. 3年生 32%

F 3. あなたはさいたま市に住んで何年になりますか。

1. 生まれてからずっと 37%
2. 10年以上 18%
3. 3～9年 7%
4. 2年以内 1%
5. さいたま市以外に住んでいる 37%

これで質問は終了です。
回答どうもありがとうございました。

お問い合わせ
埼玉大学社会調査研究センター
担当: 菱山(ひしやま)
TEL: 048-858-3120 Email: ssrc@gr.saitama-u.ac.jp

